

氷室

宮増作

前

ワキ 官人

シテ 氷室守の翁

ツレ 氷室守の男

後

ツレ 天女

シテ 氷室守の神

地は 山城

季は 六月

「八洲も同じ大君の。く。御影の春ぞ長閑けき。

詞

「そもく是は龜山の院に仕へ奉る臣下なり。我此度丹後の国九世の戸に参り。既に下向道なれば。是より若狭路にかゝり。津田の入江青羽後瀬の山々をも一見し。それより都に歸らばやと存じ候。

道行

「花の名の。白玉椿八千世経て。く。緑にかへる空なれや。春の後瀬の山続く。青葉の木陰分け過ぎて。雲路の末の程もなく。都に近き丹波路や。

氷室山にも着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。丹波の国氷室山に着きて候。此所の人を待ち。氷室の謂をも委しく尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ一声

「氷室守。春も末なる山陰や。花の雪をも集むらん。

ツレ

「深山に立てる松陰や。

二人

「冬の気色を残すらん。

シテサシ

「夫れ一花開けぬれば天下は皆春なれども。松は常

盤の色添へて。

二人「緑に続く氷室山の。谷風はまだ音さえて。氷に残る水音の。雨も静に雪落ちて。実に豊年を見する御世の。御調の道も直なるべし。

歌「国土豊に栄ゆくや。千年の山も近かりき。変はらぬや。氷室の山の深緑。く。春の気色は有りながら。此谷陰は去年のまゝ。深冬の雪を集め置き。霜の翁の年々に。氷室の御調守るなり。く。

ワキ詞「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ詞「此方の事にて候ふか何事を御尋ね候ふぞ。

ワキ「御事は此の氷室守にて有るか。

シテ「さん候ふ氷室守にて候。

ワキ「さても年々に捧ぐる氷の物の供御。拝みは奉れども在所を見る事は今始めなり。さてく如何なる構により。春夏まで氷の消えざる謂委しく申し候へ。

シテ「昔御狩の広野に。一村の森の下庵ありしに。頃は
水無月半なるに。寒風御衣の袂に移りて。さなが
ら冬野の御幸の如し。怪しみ給ひ御覧ずれば。一
人の老翁雪氷を屋の内にたゝへたり。彼翁申すや
う。夫れ仙家には紫雪紅雪とて菓の雪あり。翁も
此くの如しとて。氷を供御に備へしより。氷の物
の供御始まりて候。

ワキ「謂を聞けば面白や。さてく氷室の在所々々。上

代よりも国々に。あまた替はりて有りしよなふ。
シテ詞「先は仁徳天皇の御宇に。大和の国鬩鶏の氷室より。
供へ初めにし氷の物なり。

ツレ「又其後は山陰の。雪も霰もさえ続く。便りの風を
松が崎。

シテ詞「北山陰も氷室なりしを。

ツレ「又此国に所を移して。深谷もさえけく谷風寒気
も。

シテ「便ありとて今までも。

二人「末代長久の氷の供御の爲め。丹波の国桑田の郡に。

氷室を定め申すなり。

ワキ「実にく翁の申す如く。山も所も木深き蔭の。日

影もさゝぬ深谷なれば。春夏までも雪氷の。消え

ぬも又は理なり。

シテ詞「いや所によりて氷の消えぬと承るは。君の威光も

無きに似たり。

ワキ「唯よの常の雪氷は。

シテ「一夜の間にも年越ゆれば。

ワキ「春立つ風には消ゆる物を。

シテ「されば歌にも。

ワキ「貫之が。

地「袖ひぢて。結びし水の氷れるを。く。春立つ

今日の。風や解くらんとよみたれば。夜の間に
来る春にだに。氷は消ゆる習なり。ましてや春

過ぎ夏たけて。早水無月になるまでも。消えぬ
雪の薄氷。供御の力にあらでは。如何でか残る
雪ならん。く。

地クリ

「夫れ天地人の三才にも。君を以て主とし。山海万
物の出生。即ち王地の恩徳なり。

シテサシ

「皇図長く堅く。帝道遙に盛なり。

地

「仏日光りますくにして。法輪常に転ぜり。

シテ

「陽徳折を違へずして。

地

「雨露霜雪の時を得たり。

クセ

「夏の日に。なるまで消えぬ冬氷。春立つ風やよぎ
て吹くらん。実に妙なれや。万物時に有りながら。

君の恵の色添へて。都の外 of 北山に。つぐや葉山
の枝茂み。此面彼面の下水に。集むる雪の氷室山。
土も木も大君の。御陰にいかで洩るべき。実に我
ながら身の業の。浮世の数に有りながら。御調に
も取り別きて。猶天照らす氷の物や。他にも異な

る捧物。叡感以て甚しき。玉体を拝するも。深雪を運ぶ故とかや。

シテ「然れば年立つ初春の。

地

「初子の今日の玉簪。手に取るからにゆらぐ玉の。翁さびたる山陰の。去年のまゝにて降り続く。雪のしづりをかき集めて。木の下水にかき入れて。氷を重ね雪を積みて。待ち居れば春過ぎて。はや夏山になりぬれば。いとゞ氷室の構して。立ち去

る事も夏陰の。水にも住める氷室守。夏衣なれども。袖さゆる気色なりけり。

ロング地

「実に妙なりや氷の物の。く。御調の道も直にある。都にいざや帰らん。

シテ

「暫く待たせ給ふべし。とても山路の御序に。今宵の氷の御調。供ふる祭御覧ぜよ。

地

「そもや氷調の祭とは。如何なる事にあるやらん。

シテ

「人こそ知らね此山の。山神木神の。氷室を守護し

奉り。毎夜に神事有るなりと。

地

「言ひもあへねば山くれて。寒風松声に声立て。時ならぬ雪は降り落ち。山河草木おしなべて。氷を敷きて瑠璃壇に。なると思へば氷室守の。薄氷を踏むと見えて。室の内に入りにけり。氷室の内に入りにけり。(中入)

地

「楽に引かれて古鳥蘇の。舞の袖こそゆるぐなれ。

天女

「変はらぬや。氷室の山の深緑。

地

「雪を廻らす舞の袖かな。

後ジテ

「曇りなき。御世の光りも天照らす。氷室の御調供ふなり。

地

「供へよやく。さも潔き水底の砂。

シテ

「長じては又巖の陰より。

地

「山河も震動し天地も動きて。寒風しきりに肝をつゝめて。紅蓮大紅蓮の。氷を戴く氷室の神体。さえ耀きてぞ顕はれたる。

シテ「谷風水辺さえ氷りて。

地「谷風水辺さえ氷りて。

シテ「月も耀く氷の面。

地「万境をうつす鏡の如く。

シテ「清嵐梢を吹き払つて。

地「陰も木深き谷の戸に。

シテ「雪はしぶき。

地「霰は横ぎりて。岩もる水もさざれ石の。深井の氷

に閉ぢ付けらるゝを。引き放し引き放し。浮び出

でたる氷室の神風。あら寒や冷やかや。

シテ「賢き君の御調なれや。

地「賢き君の御調なれや。波を治むるも氷。水を静む

るも氷の。日に添へ月に行き。年を待ちたる氷の

物の供へ。供へ給へや供へ給へと采女の舞の。雪を

廻らす小忌衣の。袂に添へて薄氷を。碎くな碎く

な。解かすな解かすなと氷室の神は。氷を守護し

日影を隔て。寒水をそゝぎ清風を吹かして。花の
都へ雪を分け。雲を凌ぎて北山の。すはや都も見
えたり見えたり。急げや急げ氷の物を。供ふる所
も愛宕の郡。捧ぐる供御も日の本の君に。御調物
こそめでたけれ。